

東京大学大学院総合文化研究科 グローバル地域研究機構中東地域研究センター
[スルタン・カブス・グローバル中東研究寄付講座]



UTCMEs ニュースレター

VOL.21 2022

1. 学びの寄港地 1	3. 新任スタッフ紹介 9
(1) 真殿琴子 1	荻谷康太
(2) 山本つかさ 3	4. 駒場中東セミナー開催報告 10
2. この一品——私の研究モノ語り 5	5. センターの活動紹介 16
(1) 岡部友樹 5	6. スタッフ・発行者情報 16
(2) 出川英里 7	

1. 学びの寄港地

留学先での研究活動だけでなく、現地で生活することを通して得られる「新しい学び」をみなさまにお届けする本コーナー。連載2回目となる今号では、留学先で出会った人々との交流や彼らを通じて知り得た学びについて、お二人からご寄稿いただきました。

(1)「調和」で会いましょう

京都大学大学院
アジア・アフリカ地域研究研究科

真殿 琴子

イスタンブールのアジア側、ウスキュダルの港から魚市場を越えた先に「調和」(Ahenk)はある。モスクの裏の路地にあるそこはいつ行ってもたくさん人がいて、みんなお茶をしながらおしゃべりしている。

「調和」に初めて行ったのは2019年の夏だった。友人からある日突然電話がかかってきたのが始まりだった。聞いてみると、路上生活者にスープを歩いて配るボランティアに行かないか、という内容だった。ヨーロッパ側のジハンギルからトブハネまで、坂だらけの道をくねくねと、スー

プを配りながら進んでいく。外国人の参加者は私だけのようだった。道の途中、私は後ろの方で何気なく参加者の一人と会話する中で、普段ならまず言わないのに、その時はなぜか正直に「スーフィズムの研究をしているよ」と言ってしまった。すると、グループの全員が一斉に私を見たので、咄嗟に後悔しそうになったが、リーダー役らしき人は「なんて素敵なの！」と目を輝かせていた。その夜初めて「調和」に行った。話し始めると、打ち解けるのは一瞬だった。同席した人たちはベシクタシュにある大学を拠点としたコーラス部に参加している学生たちで、みんな音楽好きでピアノやギター、ケマンチェ、サズなどの楽器を嗜んでいる人も多かった。リーダー役の女性Fは私と同じ年で、大学で心理学を専攻しており、ボランティアへは実習の代わりに参加しているとのことだった。彼女は仲間の輪に私を迎え入れてくれた。彼女たちには常に絶妙なバランスがあった。宗教を否定したり過度に美化したりすることもなく、男女間の交流にも常に節度があった。世俗主義かイスラーム主義か、と二極で語られがちなトルコ社会においては、ちょうどその中間にいる人たちと言える

かもしれない。彼女たちはスーフィズムとも関係の深いイラーヒー(宗教歌)や民衆の間で受け継がれるテュルク(民謡)などのクラシックな音楽に親しんでおり、その中に歌われる素朴な信仰心をそれぞれが生きようとしているようにも見えた。

そんな彼女らが好んで通っていたのが「調和」であった。「調和」にはメニューもなければ、屋根もない。路地にテーブルと椅子を並べただけで、一見お店なのかもよく分からない。基本的に客はみなチャイカトルココーヒーを注文する。食べ物は簡単なサンドしかない。夏にはレモネードも出る。決してお洒落なカフェとは言いがたいその場所は、喫茶店あるいは(より厳密には)チャイハネやコーヒースタンドの部類に入と思うが、結局のところ「調和」はいつも「調和」であった。人々が何を話そうか、何を歌おうか、そこは「調和」なのだ。



ある日、コーラス部の先生を紹介してもらった。先生はトルコ文学を専門とする大学教員で、私がスーフィズム研究をしていると言うと大変喜んでくださった。そして、先生はFと私を特別にある場所へと招待してくれた。その場所はイスタンブールのファーティヒ地区にある「修行場」であった。とはいえ、どこにも「修行場」の表札はない。17世紀後半から18世紀初頭にかけてイスタンブールを中心に活躍したスーフィー聖者の墓廟に付したその場所は「テュルクスーフィズム音楽とフォークロアの研究・復興財団」が様々な文化的活動の拠点にしている施設ということであった。トルコでは建国後、タリーカ（スーフィー教団）の活動は公的には禁じられており、文化財として公的な施設となっているモスクや修行場等での活動は認められていない。ゆえに、本来建国以前はタリーカの活動拠点として儀礼や集会に使用されていた修行場（通例、テッケやデルギヤーフと呼ばれる）は博物館として一般公開されているか、いずれも何らかの宗教的な団体を背景に持つ財団や協会が後援して、各団体の伝統保護を兼ねた文化活動の場としていることが多い。後に分かったことだが、ファーティヒ地区のその施設やその関係者全体を表す言葉として、直接的な表現を避けて「財団」を用いることが通例のようであった。仲間内で「財団の人」(vakıftan) と言うと、その施設を拠点とするタリーカのメンバーかその周辺の人々のことを暗に示していた。

結論を言えば、その先生もまたその「財団の人」であり、私たちは彼らの集会に招かれたのであった。その場所のことは前から聞いており、イスタンブールでは比較的オープンな団体で海外からも訪問者が多いというのは知っていたが、誰かの紹介なしにはその門をくぐるのは困難に見えた。先生は同じ教団員のある方を紹介してくれた。その方はトルコ国内で大変知名度の高い歌手で、毎年12月にコンヤで行われるルーミーの命日(Şeb-i 'arûsと呼ばれる)を祝する催事では、メヴレヴィー教団のセマーの演目で、彼がイラーヒーを披露することが恒例となっている。2012年に初めてその催事に参加した際に、私が聞いたのも彼の歌声であったことを後から知った。緊張してしどろもどろになりなが

ら質問する私にも彼は親切に対応してくださった。青い瞳が印象的で、どこか常に遠くを見ているような深みがあった。その日の儀礼の先導役は彼が勤めていた。私たちは午後の礼拝の時間帯から深夜までそこにいた。途中、スープとパンという簡単な食事が配られたが、Fも私もごく少量ですぐに満たされ、まるで奇跡だと驚きあったのを覚えている。そのタリーカの中核メンバーは音楽家も多く、儀礼中に歌われるイラーヒーは本格的な演奏であった。女性たちは上階の狭いスペースにぎゅうぎゅうで、男性たちの儀礼を見ながら一緒に口ずさんだり、ゆらゆらと揺れたりしていた。

その夏からコロナウィルスの蔓延を経て、約2年後の2021年の夏、再びトルコに行けることが決まった。Fとはコロナ禍でも連絡を取り続けていた。心理士になった彼女にオンラインカウンセリングをお願いしたこともあった。結局私が出発する頃には秋になっていた。イスタンブールに着いてすぐ彼女と再会し、私たちはその足で「調和」に行った。そこは何も変わっていなかった。相変わらず混んでいて、客は皆お茶を片手におしゃべりしている。時の流れを感じさせないその場の空気のにまれて、私は来たばかりなのにずっとそこにいたかのような気さえした。「調和」にはどこか時を歪める力があつた。

それから私はウスキュダル有名なスーフィー聖者の墓廟近辺にある彼女の家に同居させてもらうことになった。イスタンブールでの生活が始まってから、ほぼ毎晩彼女は「調和」にいる」と連絡してきた。私も時折彼女たちに加わったが、聞き役に回ることが多かった。インフレの勢いが止まらない不穏なトルコ社会でのキャリア設計や結婚に関する心配事など、話題は暗くても会話から冗談が消えることがなく、逆境をも笑い飛ばす友人たちが頼みしく見えた。

Fの周りの人間関係もコロナ禍を経て変化があり、かつての仲間から何人かいなくなり、新しい顔触れが一人増えていた。私の帰国後も「財団」に顔を出していたFは、ある日偶然かつてのコーラス部の仲間であるTと修行場の前で遭遇し、それ以降意気投合したのだと紹介した。二人は秘密を共有する特別な関係のようだった。ただ、TはFとは違ってタリーカの正式なメン

バーであった。彼は、普段仲間たちの前ではお金と婚活の話しかしなかったが、秘密を共有している人の間では自分の「先生」(トルコではşeyhやmürşitと言ったスーフィズムの伝統における「師」を彷彿とさせる呼称の代わりに「先生」hocaや「父／おじいさん」baba/ dedeを使用することが多い)や先達の先生たちの逸話を話してくれることがあった。たまたま二人きりになった時に、どういう経緯でタリーカに加入することになったのかを教えてくださいました。彼は冬になると兵役のためアンカラへと旅立った。1ヶ月後に兵役から帰ってくるとすぐに縁談が進んだようで、自然と仲間の輪から遠ざかっていった。それから私が帰国するまで街でも「調和」でも彼を見ることはなかった。

「調和」では時々音楽家たちがイベントをすることがあった。「調和」に来る音楽家の中には「財団」関係者も多く、そのうちの一人であるサズの先生はたいいてい深夜0時を超えてからタバコをふかしながら颯爽とやって来た。Fにとって弟のような存在であるHは、その先生からサズを教わりながら、「財団」にもたまに顔を出すようになったとのことだった。彼にはFの紹介で知り合った恋人がいた。Fが二人を会わせるために選んだ先も「調和」だったそうだ。二人は出会ってすぐに交際を始めたが、敬虔な家庭に育った彼女は両親や周りの人にはHとの関係を秘密にしておき、二人きりで会うことはできなかった。その事情を知っている仲間たちは、二人の逢瀬をかなえるべく、みんなで「調和」によく集まった。彼女が席を立った時に、Hは「彼女は『財団』のことを知らないから言わないでくれ、余計な心配をさせないためにも」とすかさず私に口止めしてきた。Hも私が帰国する寸前には故郷のハタイへと帰って行った。イスタンブールで就職先を見つかることができず、都会での生活を諦めざるを得なくなってしまった彼を私たちは最後に「調和」から送り出した。なぜもっと貪欲にならなかったのかとHを咎めるFに対して、「ライラとマジヌーンのライラのように、僕は何も知らなかったんだ。僕はライラだ」と自虐する彼の口調が何となく面白くて、みんな涙が出るほど笑った。

2021年10月末から約9ヶ月の滞在

を経て、今度は私が見送られることになった。最後にFと二人だけで「調和」に行って色んな話をした。不思議な縁で結ばれて、いつの間にか親友になっていた彼女と話していると、まるで何十年もお互いを知っているかのように感じる時もあった。途中、お互いに距離を取った時期もあったが、「調和で会いましょう」という彼女のメッセージが二人の仲を取り持って、ルームメイトに戻ったりもした。今では「調和」は再び夢に見る場所になってしまった。毎度「俺は日本に親戚がいる」と平気で嘘をつく店のおじさんは今日も「チャイはいかが」と客の相手をしているんだろうか。今日も混んでいるんだろうか。また同じ場所で友人たちと再会できる日を願っている。



(2) 南仏マントンの地でめくるめく日々 東京大学法学部4年 山本 つかさ

本稿では、学部の交換留学でフランスのパリ政治学院のマントンキャンパスに留学した際の学びについて綴る。イタリアの隣町に位置するマントンは、南仏コートダジュールの海沿いの美しい小さな街であり、ほぼ唯一の大学として、パリ政治学院の一つとして中東に強いマントンキャンパスが存在する。小さな規模のキャンパスでありながらも、各々の生徒の文化背景は東大よりはるかに豊かであり、多様性に満ちた大学であった。その中でもキャンパスの特性もあり、レバノンを中心とした中東出身者、もしくは中東のいずれかの国に滞在経験のあるヨーロッパ系の学生が多かった。半年間という限られた時間とはいえども、中東に明確な当事者意識を持った学生たちとともに学ぶことができたのは私にとって大きな財産となったといえるだろう。



そういった留学環境で、学びは数多く得られたと考えているが、その中でも今回は印象深かった授業、レバノン人の友人Nadine、そして旅行で訪れた中東現地での学びについて触れたい。現地に足を運ばずに得られる学びというのももちろん多く重要であるが、この留学を通して教科書が色を帯びる感覚が得られたのが一番の収穫だった。教科書や文献で触れるよりも、あらゆる出来事が「今、現実起こっている」という実感を帯びて理解できるようになった気がしている。

「アラブの春」の授業と当事者意識

まず授業について触れたい。アラビア語や中東における気候やエネルギー開発などさまざまな授業が展開されていたが、特に印象深かったのは「アラブの春」をテーマとして取り扱った授業である。隔週で行われるその授業では、毎回シリアやバーレーンなど多岐にわたる中東の国々を取り上げ、その場所における政治的な分岐点やアラブの春前後でどのように変化があったかなどに注目した。私は法学部ながら中東への興味を抱いている身であり、まだまだ新しい知識も多く要求され日々膨大かつ未知な予習量に追われていたが、パレスチナ問題に関しては以前からの興味もあり、それを取り上げた回が非常に記憶に残っている。パレスチナ問題は、日本では、第三者的な立場で触れられることが多く、高校の世界史においては現代史であるが故に授業時間の制約下でさっと流す程度にしか触れられなかったような気がする。そういった条件下で、どこか今までの自分は他人事として捉えていたのかも知れない。それがこの授業を通してより明確に世界で起こっていることとして捉えられるようになったと感じる。レバノンにおいては同国がイスラエルと敵対関係に

あるためにパレスチナ側の文脈からしか習わないし、ユダヤ系のインターナショナルスクール経験がある人はもちろんイスラエル側の文脈に寄った話しかされないと述べていた。一方でカナダ出身の友人はほとんどこれについて学ぶ機会が少なかったと話していた。歴史や出来事は、語りに依存するというのを改めて理解する契機になったし、それが各々の語りによってどのように描かれているのか殊更に意識させられる契機にもなった。

また、詳細は知らないが、多様なバックグラウンドを持つ学生がいる故に、パリ政治学院のマントンのキャンパス内でパレスチナ問題について論争が起こったこともあるという。日本は政治についても歴史問題についても、やや俯瞰して当事者ではない立場でいようとするきらいがあるような気がしている。政治を学んでいる身として、当事者意識がないからこそ投票率が低迷しているように感じる。一方、留学中ではフランス内の政治に限らず、イギリス王室の在り方など多種多様な政治について友人と日常の会話で考える機会が豊富だった。自国に対してはもちろん、どこで起こっている問題に対してももっと当事者意識を持って問題に向き合うことが重要であると身にしみて感じた。

友人のNadineからの学び

次に私が最も仲良くしていたレバノン人のNadineからの学びについて述べたい。レバノン出身のNadineの境遇やベイルートの文化は私にとっても完全に初見で全く新しいものであった。

まず第一に、レバノンという国についてである。直近でレバノンと言われるとカルロス・ゴーンが思い浮かぶ人は多いのではないだろうか。彼女からもその話題に触れられて驚いたのを覚えている。逆に日本では中東と言われてすぐ思い浮かぶ国ではないし、なかなかマイナーな立ち位置にあると思われる。かつては中東のパリと謳われた首都ベイルートであるが、現在の状態は繁栄とはほど遠いものである。宗教間の対立、格差社会の進行、政治腐敗の進行が重なったばかりか、ベイルート港爆発事故は記憶に新しい、つい最近の出来事である。ヒズボラ兵も多く、治安がいい状態とはいえないばかりか、定期的に停電にな

るという酷いありさまである。委任統治領として歴史的にフランスと強い関係があるうえ、こういった情勢不安が相まって、Nadineいわく彼女のベイルートでの大学でのクラスメイトのほとんどが二重国籍を保有していたという。

また情勢不安の与える影響はそんな程度に収まらない。彼女や彼女の家族・親戚の境遇にまで大きな影響を及ぼしていた。Nadineはベイルートの大学の3年目の交換留学先としてパリ政治学院を選んだ結果、フランスに在住していたが、彼女の弟はモンペリエの大学、離婚している父はマルセイユ、そして母は彼女とともにマントンに移り住むという形で家族みんながフランスに移り住んでいた。親戚の多くはエジプトに移り住んでいるという。一度彼女の家を訪れた際に、彼女の母が気さくに彼女らの境遇について述べてくれた。レバノンに立派な家を建てて、そこで長く住む予定だったのに、いろんな混乱を経て、結局フランスに移り住むことになってしまったという。美しい地中海のほりにあるマントンはどこかベイルートに似ていると語る彼女の瞳はどこか寂しそうだった。一連の話を聞いて、私はパレスチナ難民の象徴である鍵を思い出していた。もちろん情勢不安の中でもレバノンには帰国できるし安易に同じにしていはいけなけれども、愛おしい故郷を離れてどこかに移り住むことを強いられるというのは果たしてどのような気持ちなのだろうか、その想像力を私は全く持ち合わせていない。

アラビアンコーヒーとデーツとモスク

最後に、オマーンを訪れたことを振り返りたい。この連載「学びの寄港地」は、

港町オマーンの首都マスカットをイメージしているという。スルタン・カブース寄付講座と名前がついているようにオマーンのスルタン・カブース・モスクを訪れることは私の積年の夢であった。モスクにいたガイドのおじさんがくれた、アラビアンコーヒーとデーツが忘れられない。留学中にたまたまロンドンのモスクを訪れた際もそうだったが、一般にイスラム教徒の人は宗教や文化に対するmutual respectさえ見せれば、他宗教の人に対してもすごく寛容な印象がある。もちろん友人のNadineは常に私の疑問に答えてくれたが、初対面のオマーンのおじさんでさえも家にまで招待してくれて彼の暮らし方や宗教との向き合い方、オマーンと石油がどのような関係で今後成り立っていくかなどさまざまな話をしてくれた。

中でも印象的だったのは、彼にとってのクルアーンの重みであった。神のありがたいお言葉を幅広い層に知らしめることを目的としているために、母音記号が全てついているということを彼は誇りに思っていた。話し言葉は時代で揺らいでも、書き言葉は揺らがらないのは神の言葉だから、というのはアラビア語の特徴であり、それが神に直接話しかけられる唯一の宗教だと彼らが主張する根拠なのだと思う。



オマーンの前後にはアラブ首長国連邦も訪れた。アブダビとドバイに足を運んだが、ドバイ万博にはひときわ目を見張るものがあった。各国のパビリオンに飽きたらず、超近代的な展示を通じて、石油で豊かな中東諸国を目の当たりにすることができた。全体の規模感から一つ一つの展示のクオリティに至るまで、どこをとっても一点のかけりも見つからない展示たちだった。それらはNadineから聞くレバノンやパレスチナの惨状と正反対で、「中東」とひとことにまとめても豊かな面から貧しい面、さまざまなグラデーションであるということをしみじみ感じた。

半年間という限られた時間であったわりに、様々なものをみて、触れて、話して経験し、学ぶことができたと感じている。「アラブの春」の授業の最後の課題は、今後10年間の中東を予測する、というものだった。正直、自国日本の将来予測ですら危ういという中で、なかなか困難を強い課題であったが、今回の留学で触れた生の感覚を忘れることなく、今後の10年間、中東においてどのような時代の渦が描かれるのか、注視したい。

2. この一品——私の研究モノ語り

本コーナーでは、自身の研究に深く関連する「モノ」を写真と共に紹介していただきます。「モノ」と言っても解釈は人それぞれでしょう。今回のモノ語りでは、紛争の記録と記憶という有形・無形のモノ、また、デジタルと実物の二側面をもつモノについて、お二人からご寄稿いただきました。

(1) 紛争の過去を語るモノ

ーレバノン内戦の記憶と記録ー

大阪経済法科大学

岡部 友樹

はじめに

世界の紛争を勉強して調べていく上で、当事者たちの「記憶」と「記録」はとても重要だ。紛争に限らず、どんなことを調べるときにも記憶と記録は重要であるが、紛争に特化した場合、その消失の度合いが激しいのが特徴だと思う。最近でこそ、紛争の様子が即時にSNSで発信されウェブ上で半永久的に保存されるようになったが、レバノン内戦が展開した1975年から1990年までは、そのような状況になかった。本誌の趣旨に正しく沿っているのか心もとないが、私に関心を持って調べているレバノンを舞台に、「内戦の記憶」と「内戦の記録」という有形無形のモノに関して紹介したい。物理的・固形としてのモノの話が少なくなってしまうことをあらかじめお断りします。

研究トピック：レバノン内戦について

周知の事実ではあるが、レバノン内戦は20世紀後半に15年間続いた紛争である。小さなレバノンの国土で、宗教・宗派や民族・イデオロギーなどを軸とするあまたの武装組織が展開し、「泥沼」と化した内戦である。また、パレスチナ解放勢力、シリアやイスラエルなどの隣国や周辺アラブ諸国、そしてアメリカを代表とした外国が陰に陽に介入し、「アラブ内戦 (Arab Civil War)」[「他者の戦争 (une guerre pour les autres)」]と言われることもある。この惨劇を止める努力が何度も試みられたが、失敗に終わった。ようやく1989年の

停戦協定「ターフ合意」が結ばれるころまでには、約7万人の死者、約18万人の負傷者、約2万人の行方不明者を出した。

レバノン内戦といえば、日本国内でも少なからず関心を持つ人々がいた。当時、日本人のジャーナリストがこぞってベイルートに特派員として出かけて行ったそう。その関心はもっぱら、パレスチナ解放運動や左派の連帯にあり、多くの日本語の書籍から当時の様子を窺い知ることができる。

私は大学院に入ってからレバノンのパレスチナ難民のことに取り組んだ。博士課程で研究を進めていき、現地を訪れる中で、レバノン内戦を真正面から深く知りたと思うようになった。いざレバノン内戦に関する研究状況を調べてみると、膨大な量の研究に圧倒される一方で、その元となった資料が断片的なことに気づいた。当たり前かもしれないが、先行研究から自動的にレバノン内戦の一端を明らかにするための資料がなかなか見つからなかったのである。その悩みについて、以下では記憶と記録をキーワードにみていく。

内戦の記憶

現地での調査を通じて見聞きした逸話から、内戦の記憶について発見したことがある。1860年のオスマン朝期に、レバノン山に住んでいたキリスト教のマロン派とイスラームのドゥルーズ派の間で「内戦」が起きた。これを最初のレバノン内戦と呼ぶこともある。長らくその記憶は継承され、20世紀の内戦でも呼び起こされることがあった。このことを本で読み、実際にドゥルーズ派の村に行ったときの話である。とことこ村を歩いていると、そのシャイフが興味深い話を教えてくれた。

イスラームのドゥルーズ派は、レバノンのみならず、東アラブ地域 (レバノン、シリア、ヨルダン、イラク、パレスチナ) に広く居住している少数派として知られる。内戦との関連で言えば、イスラエルに住むドゥルーズ派がその焦点となった。インタビューに応じてくれたシャイフは、内戦時にキリスト教民兵が、レバノン山に位置するアバイーという村の聖者廟を破壊

したが、早期にそれを再建設し、同宗派の誇りをいち早く取り戻したという。さらに、1982年にイスラエルがベイルートに侵攻した際、イスラエル軍に所属するドゥルーズ派の「同胞」たちと邂逅し、固く握手を交わしたという。そのイスラエルから来た同胞たちに連れられ、内戦によって国境が開かれたのを見計らい、イスラエル北部にあるナビー・シュアイブというドゥルーズ派の聖地を訪れたのだ。その当時の映像がYouTubeに残っており、本人が廟の前で演説する姿を見せてくれた。

このように内戦では、過去の記憶が呼び起こされるとともに、聖者廟という建造物が精神的な支柱となり、さらには国境という物理的なモノが開放されることで生じた副作用がみられたのである。



写真1-1: 内戦の記憶を語ってくれたシャイフ、右から2人目 (2018年9月10日) 筆者撮影



写真1-2: 聖者廟でのイード・アル=アドハーの様子 (2018年8月26日) サーミー・アブー・マニー氏提供

内戦の記録

英語でも、アラビア語でも、フランス語でも、レバノン内戦に関する著作はあまたある。先行研究を漁った結果、手元にあるのに関係なく、ざっと数えただけでも一次資料・二次資料 (研究書・資料集などを含む) が500点近くあった。もちろん、筆者の非力により本当の (実際の) 総数には及ばないであろうが、それでも目眩がする量だ。このなかには、アラビア語・欧米

諸語・日本語で書かれた研究書が含まれ、ジャンルだと内戦の政治史、機関誌・雑誌・事典・資料集・写真集、文学・詩・メモワール、パレスチナ／イスラエル関係、女性・ジェンダー関連、映像作品までもが含まれる。ニッチな研究で言えば、内戦期の「うわさ」に着目した本や、精神病院の歴史を内戦期からオスマン朝まで遡る書籍などがある。

紛争研究のむずかしさ

少し話が逸れるが、近年、紛争研究（とくに政治学において）は興隆を見せている。また、個々の内戦を独立して扱わず、比較の視点から多くの研究が発信されている。これには、2006年のスタティス・カリヴァス氏の理論的にも事例的にも（ギリシャを扱った）大著である『内戦における暴力の論理』が分水嶺となっている。ここから、研究者の視点が、内戦の詳細な叙述を基礎として、その「なかみ」である暴力や武装組織などに関心が向けられるようになった。

つまり、内戦中に何が起こったのか、という原初的な問いである。ただ、これを明らかにするには、やはり記憶と記録が手がかりとなる。紛争研究一般では、「紛争アーカイブ (conflict archive)」の利活用が促進されている。文字の記録はもちろんのこと、オーラルヒストリーを利用したり、紛争のことを振り返るワークショップを開いたり、はたまた定量分析など、あらゆる方面から紛争の実態に迫ろうという試みが盛んだ。

レバノンの文脈で、紛争のなかみを明らかにするには、いくつかのハードルが立ちだかる。なぜなら、紛争後の「移行期正義 (transitional justice)」が、紛争を戦った兵士たち（現政治家）に乗っ取られたからだ。要するに、昨日まで軍服を着てカラシニコフを背負っていた者たちが、次の日にはピシッとした背広を着て、国会で白々しく舌を捲き立てている状況である。このような勝者の正義により、公的な記録が残されていない。また、各宗派の言い分は、まるで180度異なる。国立図書館 (al-Maktaba al-Waṭaniyya al-Lubnāniyya) はあるものの、研究者が調査で使うには心もとない状態で整備がなされていない。

20世紀の内戦に比して、19世紀の内

戦を扱った研究を眺めてみると、この内戦当時には、欧米列強の主導であるものの、内戦で何が起こったかを検証する委員会が設置され、文字資料が残されている（その資料は未だ利活用されていないのだが）。19世紀には行われた真実解明の動きが、時代が降った20世紀の紛争ではなされなかった。これは旧ユーゴスラヴィアやルワンダなどで紛争後に創設された国際法廷や、真実和解委員会などとは大きく異なる状況である。

NGOの活動：紛争をアーカイブする

このような状況にあっても、過去への理解を深め、行いを清算しようとする人々がいる。政府が内戦の記録を整理しないことを尻目に、市民社会／非政府団体がその活動を担っており、これもレバノンの特徴の一つである。そのひとつに、内戦当時の声を未来に継承しようと活発に活動しているNGOのUMAM Documentation & Research (以下UMAM) がある。この団体の創始者の1人である、ルクマーン・サリーム氏は、2021年に暗殺によって帰らぬ人となった。この暗殺というのもレバノンの政治史を特徴づける一つとして、現在調査を進めている。早く現地に戻れる日が来ることを祈っている。

また、Fighters for PeaceというNGO団体は「紛争の語り部」として積極的に舞台上に登場している。彼らは、元武装組織の兵士たちであり、過去の行いを償い、共存の未来へ向けて各地で講演会やワークショップを開いている。移行期正義が果たされなかったレバノンにおいて、個人的な因縁や復讐の恐れがあるなかでは、敬服に値する活動である。

別のNGOであるLebanon Renaissance Foundationを訪れた時のことが忘れられない。同団体は、レバノン内戦で起こった暴力を主要な新聞2つから丹念に拾い上げ、データベースを構築した。このような試みは、レバノン内戦の記憶・記録を保存するという意味でも、研究者のリソースとしても重要であり、ありがたい。しかしながら、同NGOがデータベースの完成を祝して開催したプレスカンファレンスでは閑古鳥が鳴いていたという。「人々は、内戦の過去に興味がない。」同団体の職員が語った言葉が今でも胸に残っている。

はたまた、最近注目しているのは、twitter上で展開するアカウント名「أرشيف لبنان Lebanon Archives (@booklebanon)」だ。中のひとはどのような人物か分らないが、日々、内戦に関する情報を泥臭く発信しており、デジタル時代のアーカイビストとして今後もウォッチを続けたい。



写真2：内戦で破壊されたシナゴグ
(2018年9月10日) 筆者撮影

おわりに

以上、いかなる形であれ、紛争の記憶を風化せず記録し、それを未来への共存と理解へとつなげていこうとする人々の努力には敬意を払いたい。外国人で、言葉もままならない私にとってどのような形で貢献できるかは不透明だが、なかなか研究テーマが思いつかなかった、見つからなかったときに手を差し伸べてくれたのも、レバノン人であった。現在では、内戦における宗派内暴力（いわゆる兄弟殺し）に関心をもって調査・研究を行っている。レバノン内戦において長らく見過ごされてきた側面である。「兄弟殺し (fratricide)」とでもいふべき、同じ宗派内での紛争（たとえばシーア派内部やキリスト教内部）は、これまで研究蓄積の厚い支配的な亀裂に沿った紛争（ここでは宗派間や民族間の紛争）と同時並行で展開していたこともレバノン内戦の忘れられた特徴のひとつである。

コロナ禍で現地調査が思うように叶わず、現地では過去最悪の経済・金融危機、そして国全体の電力が、人々の瞳の輝きとともに、日々衰弱していついていくと聞く。そんな環境でも、日々明るい顔で現地からのメッセージを送り続けてくれる、少し年上の友人（元レバノン軍の軍人）と、バイルートのハムラ通りのカフェでもう一度談笑できることを願いながら、日本での教育・研究生活に精を出したい。

【私の研究室】

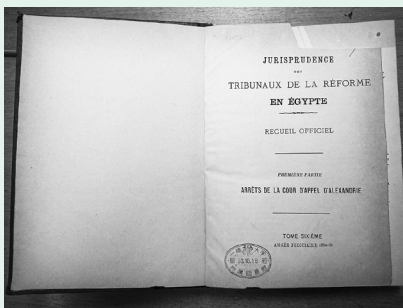
私は、大阪府八尾市にある大阪経済法科大学に所属しています。同キャンパスは、市内からもそれほど離れていない一方で、山の中にひっそりと佇む落ち着いた大学です。同大学の研究室に篋りながら、せつせと教育・研究を行なっております。

(2) 混合裁判所の『判例集』—史料からわかること、わからないこと

千葉大学大学院

人文公共学府博士後期課程

出川 英里



『判例集』第6巻（一橋大学附属図書館所蔵）

私が「この一品」として紹介するのは、研究で利用している史料『エジプト混合裁判所判例：公式選集』（*Jurisprudence des tribunaux de la réforme en Égypte: recueil officiel*, 以下『判例集』と表記）である。本稿では、私が混合裁判所に関心をもち、『判例集』を史料として利用するに至った経緯と、『判例集』を使った研究をして考えたことを述べていきたい。

『判例集』に出会うまで

まず、混合裁判所について簡単に説明しておく。混合裁判所は1875年に設立され1949年まで存続したエジプトの裁判所である。この裁判所は、エジプト人と外国人および異なる国籍の外国人の間に生じた民事・商事事件と、外国人による一部の刑事事件に対して裁判権を持った。裁判は外国人とエジプト人裁判官双方が出席して行われた。しかし、出席裁判官のうち外国人裁判官が過半数を占めた。裁判所の設立や運営には欧米14か国が関与した。さらに、この裁判所はフランスの法や制度

に影響を受け、第1審と控訴院の2審制をとり、設立に伴って民法典をはじめとする混合裁判所諸法典が制定された。

こうした特徴を持つ裁判所が設けられた背景には、1860年代以降、エジプトが国際的な綿花生産・流通網に組み込まれる中で、商業機会を見込んで多くの外国人が流入したことがあった。外国人の増加と彼らの経済活動の活発化に伴い、外国人が関わる紛争の処理方法が問題となった。これに対して、エジプト外務大臣ヌーバルは、各国の領事裁判所など既存の司法制度に代えて、外国人が関わる訴訟を一元的に管理することを目指し、混合裁判所の設立を提案した。

本稿で紹介する『判例集』には、例外もあるが、アレクサンドリアにおかれた控訴院の裁判判例が収録されている。なお、混合裁判所は同時代のフランス語出版物では *tribunaux mixtes* のほか *tribunaux de la réforme* と表記される。したがって、『判例集』のタイトルにある *tribunaux de la réforme* は混合裁判所のことを指している。アラビア語表記は *al-mahākīm al-mukhtalīṭa* である。

私が混合裁判所に関心を持ったのは、博士前期課程に入学する前のことであった。杉田英明『日本人の中東発見』（東京大学出版会、1995）を読む中で、明治政府が混合裁判所の調査を行っていたことを知った。明治政府は、条約改正交渉時にイギリスからエジプトの混合裁判所を例とした司法制度改革を勧められていたのである。私はさらに、中岡三益による日本人の混合裁判所調査に関する一連の論文を読み、混合裁判所を博士前期課程での研究テーマとしたいと考えるようになった。中岡は自身の専門である近代エジプト社会経済史の観点から、混合裁判所は外国人や外国企業の経済活動を保護し、領事裁判権を実質的に存続させる制度であるとした（『アラブ近現代史』岩波書店、1991）。こうした見方をうけて、私は「混合裁判所はエジプト社会にどのような影響を及ぼしたのか」「実際の裁判はどのようなものであったのか」という疑問を抱くようになった。そこで、混合裁判所の裁判実態がわかる史料を探して関連文献をあたった。その中で行きついたのが『判例集』であった。

『判例集』を手に入れるため、まずは国

内の図書館や文書館に所蔵されているかを調べた。しかし、検索の仕方が間違っていたのか、うまく見つけることができなかった。（後にいくつかの図書館に所蔵されていることが判明した。）入手方法がわからず困っていたところ、先生方から「最近ではデジタルアーカイブで公開されている史料も多い。一度調べてみてはどうか。」というアドバイスをいただいた。そこで、フランス国立図書館の電子図書館である Gallica や Google Books 等で検索してみた。すると、探していた『判例集』が見事にヒットした。調査を進めるうちに、『判例集』は、出版年の記載がない巻もあるが、1年ごとに刊行されていることがわかってきた。そして、裁判所設立初年度の判例を収録した第1巻から、1907年に出版された第31巻までの存在を確認することができた。しかし、いくつかの巻はタイトルに第1部とあるが、第2部の情報が全く出てこないなど不明点も多かった。手探りではあったが、私はデジタルアーカイブを利用して、可能な限りPDFをダウンロードしながら『判例集』を集めていった。

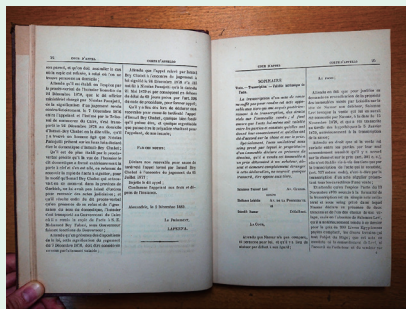
『判例集』の実物を見ることができたのは、私が博士後期課程に入ってからのことである。実物を見て感じたことは、大きさや重さといった、史料の「モノ」としての特徴は、自分の目で見て手に取ってみたいとわからないということであった。また、デジタル化されていない（あるいは、デジタル化されていても利用できない）巻も存在する。その場合、該当する巻が国内の図書館に所蔵されていれば、そこに赴き、『判例集』に収録されている判例の一覧表を作成しつつ、必要な部分をコピーするという方法で収集を進めている。少し手間ではあるが、実物を見ながらの作業は私にとって楽しい時間である。

『判例集』と向き合う

『判例集』を入手できたのは良いが、この史料を研究で利用するためには、その性格や特徴を把握しておく必要がある。しかし、それらの点を詳細に検討した研究は見当たらなかった。そこで、個別の判例を読む前に、『判例集』が発行された経緯や、そこにどのような情報が書かれているのかを確認することにした。

とはいうものの、残念ながら『判例集』

の編纂者や編纂目的については、まだ十分に明らかにできていない。1冊の『判例集』には、1年度分の判例がまとめられている。しかし、収録される判例数は、その年度の控訴院判決数よりも少ない。そのため、『判例集』は控訴院で下されたすべての判決を網羅しているわけではないと考えられる。



『判例集』第6巻 24-25頁（一橋大学附属図書館所蔵）

『判例集』から得られる情報については、判例の形式に注目して整理した。判例の形式はおおよそ統一されている。訴訟の争点を示す件名、控訴人と被控訴人の名前、弁護士名、判決日、裁判長名など、判例を構成する各要素を表にまとめていった。

この作業だけでも、いくつか興味深い点が見えてきた。まず私は件名に着目し、これに基づいて判例を分類すれば、『判例集』に収録される訴訟の種類を量的に示すことができると考えた。しかし、件名が複数ついていたり、売買や債権債務など具体的な訴訟内容ではなく訴訟手続きに関する件名しかないことも多かったため、分類はうまくいかなかった。控訴人と被控訴人の名前には、パシヤやペイといったエジプト政府官僚の称号をもつ人物や、女性の名前もみられた。さらに、個人だけでなく会社や銀行、エジプト政府や行政機関なども当事者として登場していた。また、判例は一部イタリア語のものもあるが、多くがフランス語で書かれていた。混合裁判所の組織規則ではアラビア語、フランス語、イタリア語が使用言語として定められた。1905年から英語も加わる。しかし、確認した『判例集』にアラビア語の判例は1件もなかった。

『判例集』の内容をざっと眺めてみると、網羅性の点で限界があるものの、混合裁判所での裁判の様子を具体的に知ること

ができる史料であるように思われた。いよいよ個別の判例を読み込んでいく段階になった。この時、私は土地にかかわる訴訟に関心を持っていた。その理由は、G.ベアーらによる近代エジプト社会経済史研究の中で、混合裁判所の法制度が19世紀後半以降の大土地所有形成を促進したことが指摘されていたためである。私は作成した一覧表から、農民が保有する耕作地に関係しそうな判例（例えば外国人による耕作地の差押えなど）をピックアップしていった。

実際に判例を読んでみると、想定したよりも訴訟当事者や訴訟の経緯に関する情報が少ないことに驚いた。判例なので当然かもしれないが、記述の中心は当事者の主張に対する裁判官の見解や判決の根拠に置かれていた。当事者の居住地や職業、国籍などの情報や訴訟の経緯は、書かれていたとしても断片的であった。しかし、係争地が所在する村の名前がわかれば、人口センサス等を利用して係争地に関する情報を集めることができた。また、一つの案件について何度も裁判が行われることもあり、複数の判例をつなぎ合わせることで、ある程度訴訟の過程を再構成できる場合もあった。判例に記載される法令は、できるだけ法令集で内容を確認するようにした。慣れない法律用語に苦戦しながら、法律用語辞典なども利用しつつ判例を読み進めていった。フランス史の先生に訳のチェックをお願いすると、快く引き受けて下さり、うまく訳せない部分を一緒に考えていただいたことも多々あった。

このように、混合裁判所での裁判実態を知るために、『判例集』を史料として試行錯誤しながら修士論文を仕上げた。しかし、『判例集』を利用して気づいたことは、個別の訴訟を検討するためには、混合裁判所の法制度や、土地訴訟であれば当時の土地制度を十分に理解していなければならないということであった。そうでなければ、訴訟当事者の主張が何に根拠しているかわからないし、下された判決が当事者にとってどのような意味を持ったかを考察することができないのである。

勉強することがたくさんあることがわかったのだが、何から手を付ければよいのか迷ってしまうことも多かった。そんな時には、2013年にエジプトへ旅行に行っ

たときの写真を見てモチベーションを高めた。



上の写真はカイロからアレクサンドリアへ列車で移動する途中で撮影したものである。研究に行き詰った時は、このデルタ地帯の農村風景の写真を見ながら、係争地となった村の様子を想像して楽しんでいる。現在は『判例集』から少し離れて、混合裁判所の設立経緯や制度を中心に研究を進めている。そのうえで、改めて『判例集』を用いた事例研究を行うことで、より深い考察ができるのではないかと考えている。

【私の研究室】

私が所属する千葉大学人文公共学府には、学府内に様々な学問分野が含まれる。私が入学した千葉大学文学部史学科（現在は歴史学コース）は日本史・東洋史・西洋史の区別を設けず、学生が関心のあるゼミに出席し、次第に専門を決めていくという特色を持っている。大学院でも、歴史学系のゼミには異なる地域・時代を扱う学生が集まることが多い。自身の専門を深めながら、様々な地域・時代の研究に触れ、そこで得た知見を自分の研究に生かすことができる環境だと感じている。

3. 新任スタッフ紹介

着任のご挨拶

刈谷 康太

2022年4月1日より、大学院総合文化研究科地域文化研究専攻の准教授に着任し、グローバル地域研究機構中東地域研究センターの運営に携わることとなりました刈谷康太と申します。学部生の頃から現在に至るまで、もう20年以上になりますが、西アフリカ（サハラ以南アフリカ北西部）の歴史に関心を抱いて勉強をしてきました。

「西アフリカのことを勉強している人間が何故中東地域研究センターに？」と感じられる方もいらっしゃると思いますが、西アフリカは（更には東アフリカも）、政治・経済・社会の諸領域において、古くから中東（もしくは西アジアや北アフリカ）と密接な結びつきを有してきた地域です。それは人やもの、情報の大規模な移動に基づく関係ですが、そうした関係を支えた2つの要素であるイスラームとアラビア語が私の研究の核にあります。

イスラームは、7世紀前半に中東のアラビア半島で成立し、驚くべき速さで周辺地域に拡散・定着していきました。8世紀の初頭には北アフリカの西端にまで広まり、更に、サハラ沙漠交易による人々の往来などを通じて、どれだけ遅くとも11世紀には西アフリカへと伝播していたことが史料から確認できます。その後、この地域のムスリムの数は増加していき、現在、同地は世界有数のムスリム集住地域になっています。つまり、西アフリカにはおよそ1,000年のイスラームの歴史があり、その発祥の地である中東を「中心」とする歴史的な広域イスラーム圏を構成し続ける重要な一部であった訳です。

もう一つの要素であるアラビア語は、イスラームと深い関係を持つ言語です。古くから中東との間に盛んな交流があった西アフリカの人々のうち、アラビア語の運用能力を持つ者は、政治権力者に仕える書記や役人として、もしくはサハラ沙漠交易などに携わる者として、特に記録や通信の面において重要な役割を果たしてきました。しかし、そうした政治的・経済的領域のみ

ならず、アラビア語は、西アフリカのムスリム社会そのものの根幹を考える上でも看過することのできない言語と言えます。その理由は、ムスリムにとって最も重要な聖典『クルアーン』や、預言者ムハンマドの言行録であるハディース、中東のイスラーム知識人がものした膨大な量の宗教書などがアラビア語で書かれたからです。別の言い方をすると、彼らがムスリムとして生きるために必要な知識や情報の多くがアラビア語で記され、それらの理解が彼らの信仰世界の礎の構築に不可欠であったということです。更に言えば、西アフリカのムスリムは、そうした外部のアラビア語の媒体から受動的に知識を吸収するだけではなく、自らも母語ではないアラビア語を駆使して宗教書や歴史書を始めとした数多くの著作を残してきました。

私の研究は、こうした西アフリカの内外で書かれたアラビア語著作群の分析を通じて、西アフリカのムスリムが、中東から西アフリカに至る歴史的な広域イスラーム圏においてどのような知識を受容したのか（もしくはしなかったのか）、そして受容した知識を個々の時代的・地的文脈に落とし込んで如何に解釈・再構築しながら、どのような主張を展開したのか（もしくはしなかったのか）を解き明かすこと—— 換言すると、中東を「中心」とした広域イスラーム圏において歴史的に形成された西アフリカ・ムスリムの知的世界を描き出すこと—— を目的としています。このような私の研究の視座は、言うまでもなく、中東ではなく西アフリカに置かれています。ですが、この視座を生かすことで、私の研究は、本センターの活動に微力ながら寄与できるのではないかと考えています。何故なら、より多面的で充実した中東地域研究の実現には、中東に視座を置き、この地域を内側からつづさに見つめる本流の研究に加え、中東以外の地域に視座を置き、外から中東を眺める研究—— 時に本流の研究に対して相対化の視点を提示できるような研究—— も必要であると考えているからです。

上記のような研究をしている私が本センターの運営に参画できるということは、

本センターの活動が極めて広い意味での中東地域研究に開かれていることを意味しています。この開放性を最大限に生かすことで、中東という地域を内から見る視点と外から見る視点との有意義な交錯が起こるような場を構築できればと思っています。何卒よろしくお願い申し上げます。



西アフリカで書かれたアラビア語著作の写本

4. 駒場中東セミナー開催報告

東京大学中東地域研究センター(UTCMES)では、日・オマーン外交関係樹立50周年である本年、さまざまなイベントを企画しています。その一環として、6月から8月にかけて全6回にわたるセミナー「深掘り！オマーン・スルタン国」を実施しました。約2年ぶりに対面(オンライン併用)での開催となり、大勢の方にご参加いただきました。また、駒場博物館では「オマーン展」を開催し、ギャラリートークの第1回目には、講師に写真家の佐藤美子様をお迎えし、「オマーンの誇り：王家が率いる馬事文化」とのタイトルでお話をいただきました。

第1回 2022年6月11日(土)

『アラブの海洋国家オマーンとその歴史：国家と人々』 福田 安志
(アジア経済研究所・ジェトロ名誉研究員)

オマーンは中東内でも珍しく「海」との結びつきが強い。それは「預言者ムハンマドのメッセージとイスラムは陸地を通して伝わったが、その地理的位置故に、オマーンは基本的に海洋国家である」という、Shaikh Abdullah Bin Mohammed Al Salimi(オマーンの宗教大臣)が“Oman A Maritime History”に寄せた序文の言葉にも表れている。本講義では、海との繋がりでもたらされた文化や、その歴史の変遷が紹介された。

まず、オマーンには古くから魚を食べる伝統がある。1970年以前にはオマーンに住んでいた人々はタンパク質の6割を魚から得ていたとの記述があるほどだ。現在でも、1人当たり魚摂取量はサウジアラビアの2倍以上に上る。運搬や長期保存のため、魚を塩漬にすることも多かった。また、腐敗防止のために表面を焼いて炭化させたサメが内陸部で食されていたこともある。

経済や文化にも外国の影響が色濃い。例えば、歴史上硬貨を鑄造することはほとんどなかったため、通貨は外国のものが使用

されている。近代には、銀貨のマリアテレジアドルが広く流通していた。また女性の服装は独特で、インド亜大陸で着られているものに似ている。

なぜ、多様な外国の影響が見られるのだろうか。理由は、やはり「海洋国家」に集約される。人々はインド洋の季節風であるモンスーンを利用し、帆船を使い、アフリカ東部やインド亜大陸の沿岸部との貿易を続けてきた。その過程で海外から様々な影響を受けることになったのである。現在のオマーンを含む地域はアジアとアフリカを結ぶ中継地として、古くから重要であった。ちなみに、かのヴァスコ・ダ・ガマも北上するモンスーンに乗り、インドまで到達したと言われていて、その際に航海を案内したのはオマーン人だと言われている。遠洋航海に利用された三角帆船はダウ(Dhow)と総称されることが多いが、厳密に言うとはダウは英語が起源で、さまざまな型ごとにそれぞれ名前があることに注意したい。

8世紀半ばにアッバース朝が成立すると、ペルシャ湾を経由する貿易が増え、ソハールが中継貿易港(アントレポー)として活躍した。インドや東アフリカ、遠くは中国と貿易を行った記録もあり、関税収入で経済が潤った。アッバース朝が滅んだ後はホルムズ王国が海上支配権を握り、クリークがあって見晴らしの良いカルハートがホルムズ王国の双首都として栄えた。中継貿易と海上支配は後のオマーン人の海洋活動の原型になった。貿易活動はインド商人、ユダヤ人、キリスト教徒などさまざまな人々を呼び寄せ、国際色豊かな都市の発展をもたらした。

16世紀になると、ポルトガルがオマーンを攻撃した。大砲を搭載したポルトガルの大型帆船は圧倒的な戦力で旧通商網を破壊し、ポルトガルはインド洋貿易を支配した。拠点の一つとして選ばれたのは、マスカトである。岩山で後背地から切り離され外敵からの防衛が容易で、天然の良港で大型帆船が入港し停泊でき、ホルムズ海峡に近かったことが、ポルトガルにとって何よりも魅力だったのだ。この選択に、ポルトガルは周辺地域の領地支配には興味が

なく、あくまでも海洋ルートの支配および維持のための拠点を得たいと考えていたことが見て取れる。

1650年には部族勢力をまとめ上げたヤアーリバ朝がマスカトを奪回し、イマームはポルトガルに代わって海上貿易への支配を強めていった。この活動は18世紀半ばに始まったブーサイド朝に引き継がれた。ブーサイド朝の下では、18世紀末にエジプトの混乱による紅海を経由した貿易ルートが衰退し、代わってペルシャ湾経由の貿易ルートが多く用いられるようになったことがあり、マスカトを拠点とした中継貿易活動は隆盛を極める。しかし、19世紀に入ると、エジプトの政治的安定で紅海ルートが復活しマスカトを経由しない貿易活動も増え、さらに、イギリスによる奴隷や武器貿易への規制が強化されるなどで、オマーンの貿易活動は徐々に衰退していった。1840年代には、スエズとインドを結ぶ蒸気船の定期航路が始まり、後にはスエズ運河が開通し、マスカトを拠点とし帆船を用いたオマーンの貿易活動は衰退した。そこで、19世紀に重要性が増したのは、ザンジバルの経営である。

ザンジバルは現在のザンジバル島やペンバ島などを含むタンザニアの島しょ地域を指す。通商活動を通じてオマーン人の移住が進み、19世紀にはオマーンの東アフリカ領の拠点となった。とりわけ、サイイド・サイードは活動の中心をザンジバルに移し、オマーンの繁栄に貢献した。その後、1964年のザンジバル革命によりオマーンのザンジバル支配は終わり、多くのアラブ人が国外へと避難した。当時、オマーンは鎖国政策を実施していたため、人々はオマーンに戻れず、イギリスに逃れた。

オマーンの歴史は、他地域、とりわけインド人の活躍によって基礎付けられていて、オマーン人のみで語ることはできない。同時に、東アフリカとの交流はアラブ・ペルシャ文化がスワヒリ世界に影響を及ぼしたことも意味する。海を橋としたダイナミックな相互作用で、オマーンと周辺地域は形作られているのだ。

(後藤香織・東京大学理科二類)

第2回 2022年6月18日(土) 『オマーン社会の成り立ちと人びとの暮らし』 大川 真由子(神奈川大学)

大川真由子教授は中東の文化人類学が専門で、コロナ禍の前は毎春にオマーンを訪れ、現地の人々と衣食住を共にして調査していた。マイノリティの研究を最前線で行う大川教授だからこそ知っている、オマーン社会の構造や文化の講演が行われた。

1960年代まで、オマーンは部族社会だった。つまり部族ごとに集住し、父系出自に基づいたアサビーヤ(伝統的紐帯)が強く、部族内婚も一般的だった。しかし、1970年に前スルターンが宮廷クーデタを起こして即位したことで、近代化政策が始まった。とはいえ、オマーンは湾岸諸国内の最貧困国としても知られていて、一人当たりGDPはカタールの三分の一、UAEの半分ほどである。

湾岸諸国の「均質的な国民」というイメージと相反し、オマーンは内部の多様性に富んでいる。エスニシティはアラブ系の他にインド・パキスタン系やペルシア系がいて、その中でも例えば、アラブ系はシーア派のバーリナヤやアフリカから引き揚げた「ザンジバリー」などに細分される(なお、「ザンジバリー」は蔑称として用いられることもあることに留意したい)。また、廃止後も1970年代まで社会的に存続した奴隷制は今も影響を及ぼし、とりわけ村落部では自由民と奴隷の線引きが明確だ。奴隷制は、アラブ人初のブッカー賞受賞作家となったジャウハ・アル＝ハーリシーの著作 *Celestial Bodies* にも描かれていて、受賞時には国内で賛否を巻き起こした。

社会階層や民族性、さらに部族においても多様な国民を統合するため、「オマーン人」意識を醸成する政策がいくつも実施されてきた。まず国家への忠誠心を醸成するため、アサビーヤは再編され、部族で中心的地位を担っていた人々は官僚化された。これにより、部族の中央政府に対する反抗を防いでいる。一方で、議員ポストや政府での職位はバランス配分が為され、マイノリティ集団からも代表が選ばれるように調整されている。国民意識創出のため、誰もが共有できる「オマーン帝国」の歴史教育が徹底され、歴史を扱う社会科教科書は国定の一つしか認められていない。ナフダ

(国家繁栄)の記憶も、政府官報や博物館で華々しく称賛されている。

しかしながら、自国民と外国人の格差は激しい。外国人は人口の4割近くを占めるものの、最低労働賃金は適用外だ。国籍に基づく分業体制がなお続き、自国民は政府部門の85%以上を占めるのに対し、民間部門では2割にも満たない。国籍取得の条件も、20年間一度もオマーンを離れず、アラビア語の能力を有する者に限られ、国際結婚も規制されている(ただし、湾岸アラブ諸国は除かれる)。

オマーン人の暮らしに着目すると、基本的には男女隔離の生活が営まれる。現在も家族の関係が重視され、男性は4人までの女性と結婚が許されている。イトコ婚、特に父方平行イトコ婚が選好され、血縁関係にある夫婦は半分以上だ。また、家族にとってメイドの存在も大切で、近年はフィリピン系メイドの賃金高騰により、アフリカ市場への拡大が見られる。国際的にメイドの人権が問題になっていることもあり、各国の大使館が最低労働賃金や保護対策を規定する場合も増えてきた。そして、女性の民族衣装や食文化ではインドとアフリカ、アラブ文化の融合が見られるものの、男性衣装は国民アイデンティティの象徴として厳格に取り扱われている。外国人の着用は禁じられていて、色や生地、刺繍などを少しでも変えると罰金(約35万円)を支払わねばならない。

このように、アラブの伝統的生活が特徴的であるものの、オマーンでは政府主導の国家フェミニズムも活発だ。ある女性大臣が「なぜ女性だけが犠牲を払って平等を主張しなくてはいけないの」と発言したり、インタビューした中流階級女性の9割以上が「フェミニズムは不要」だと語っていたりして、女性の努力ではなく、男女平等は国家が与えるべきものという考えが女性のあいだでは浸透している。その政策は功を奏し、「アラブの春」以前から法廷における証言価値の男女平等実現(イスラム法では、男性の証言は女性の2倍の価値とされる)や男性後見人制度の廃止が行われている。現在は湾岸初となるオマーン人母と外国人父の子の国籍取得も認められていて、政府のリベラルなスタンスに対する国民の満足度は高い。

アラブ系のみならず、非アラブ系や外国

人に支えられてきたオマーン社会は、文化的一体性に欠けるからこそ統合機構を必要とした。さまざまなナショナリズム装置で「オマーン国民」意識を創出できたものの、未だに外国人との格差は大きい。また、アラブ人というエスニシティの中にも部族の序列が存在し、結婚や就業の際に顕在化することも忘れてはいけない。今後、格差や序列が是正されるのか、はたまた「国民」意識が崩れてしまうのか、オマーンの歩む道に注目したい。

(後藤香織・東京大学理科二類)

第3回 2022年6月23日(木) 『オマーン国との絆：広島オマーン友好協会の歩み』 福島 和宏・竹中 奉之 (広島オマーン友好協会)

日本とオマーンの外立樹立50周年を記念とした本講座の第3回では、広島オマーン友好協会の福島和宏会長と竹中奉之事務局長が登壇された。両講師は、第12回アジア競技大会でのオマーン選手の受け入れをきっかけに、広島市とオマーンの25年にわたる交流の礎を築いた方々である。

講演の前半には、福島講師と竹中講師が、オマーンを訪問した際に印象に残った風景や出来事について、イメージ豊かな写真とともに語られた。

例えば、オマーンでは、買い物は男性がするものであるというしきたりがあるため、両講師が市場を訪問された際も大勢の男性が魚市場に訪れており、にぎやかな雰囲気を作り出していた。市場の天井は草ぶきになっており、日除けになるとともに、人通りの多い市場の上で静かな影を落としていた。

シャングリラというホテルの近くにはダイビングスポットがあり、クジラやイルカを見るためのウォッチボートも走っているのだという。

ニズワという町の訪問時の写真とともに、町に関するエピソードも紹介された。ニズワホテルでは、かつて日本の皇太子殿下が宿泊された際に、気さくな性格のカブス国王がおしのびでいらちゃったそうだ。ニズワの町ではフライデーマーケットが開催されており、山羊や牛の競りが行われている他、以前は職人が多く店を

開いていた。

ミスファという村では、石でできた家があり、1階に男性、2階に女性や子供が住んでいた。現在は国営の家にとってかわられているのだという。子供たちはみな素足であった。

シャルキーヤ砂漠を横断された際には、あまりにも人通りが少ないために、運転手が時速100km超えのスピードで砂の中を突っ切った。その向こうのバハラ城では、町を囲む城壁が世界遺産となっていた。町では人間より多くのラクダがいて、ラクダレースがよく開催されるのだという。

写真の他に、会場では、オマーンで有名な乳香や砂漠の砂の実物を展示され、同国の風景を視覚だけでなく肌でも感じることもできた。

このように、自然と人々が調和しながら暮らしているオマーンという国の風土を紹介された両講師は、オマーン友好協会の歩みについても話された。戦後の広島は、国際平和都市になるとともに、野球やサッカーなど数多くの競技で名選手を輩出するスポーツ都市としても有名になってきていた。そして、それまで首都で行われていたアジア競技大会への誘致を、地方都市としては初めて成功させた。選手団のおもてなしの母体として公民館が選ばれ、広島市の一つの公民館が一国のおもてなしを担うことになった。安東地区公民館の担当となったのがオマーンである。同公民館では、オマーンを歓迎するための知識を得ることを目的に、同国大使館を訪問した他、クイズ大会などを通して地域住民への教育も行った。選手団の入国以後は、子供を中心に選手の応援を実施した。オマーン選手側も歓迎への深い感謝の気持ちからか、幼稚園や小学校への訪問を積極的に行ってくれた。競技会の後、小学生を中心にオマーン訪問団を結成し、オマーンに日本式の学校を建設したスワード先生のもとで、オマーンの文化を学んだ。そうした密接な交流のおかげで、オマーン側の強い要望もあり、広島に友好協会が設立され、一都市と一国の25年にもわたる繋がりが生まれたのだ。それ以降、オマーンでの子供神楽の公演、スルタンカブース大学の学生の受け入れ、オマーン外務省の方々の協会訪問、原爆に関する写真を展示した『広島平和都市写真展』のマスカットでの開催な

ど、教育・文化・外交など多様な方面にわたって、人や風物のやり取りが続いた。

質疑応答の際、「一都市としては前例のないオマーンという国との交流を推進できた秘訣とは？」と尋ねられた福島講師と竹中講師は、「外交上の問題や文化の違いなどには目をつぶり、お互いのいい点を尊敬しあうような関係を築くこと」とおっしゃった。オマーンには貧富の差もあり、イスラーム文化圏という大きな文化の違いもある。実際、大学生を受け入れた時もお祈りのための場所を準備するなどの対応が必要になったこともあった。しかし、そうした違いを悪いものとして指摘するのではなく、自発的な応援や交流をベースに、ビジネスや政治的な事情を絡めず、なごやかな雰囲気の中で交流していくことが大切なのだと述べられた。実際、個人会費によって友好協会の運営を支援してくださったり、交流イベントの際には積極的に参加してくださる「自発的な交流者」が、広島市にはたくさんいらっしゃるのだという。

交流のスローガンである“Think Globally, Act Locally”をもって講演を締めくくられたのが、非常に印象的であった。
(上笹のぞみ・東京大学総合文化研究科広域科学専攻)

第4回 2022年7月7日(木)

『カーブース国王の遺産を超えて：湾岸情勢と新たなオマーン政治・外交』

村上 拓哉(中東戦略研究所)

現代オマーンにどのような印象をお持ちだろうか。オマーンは「中東のオアシス」「中東のスイス」とたとえられることがあり、平和、安定、繁栄、中立、穏健など好意的な印象がもたれることが多い。しかし、そのような印象とは裏腹に、2021年のオマーンのGDP比国防予算は世界トップクラスの8%である。第4回セミナーでは、このように複雑な顔をもつオマーン政治・外交について、現代オマーンの起点であるカーブース国王の治世やハイサム新国王の下でのオマーンの今後の話が中心に取り上げられた。

1968年、英国がスエズ以東からの撤退を宣言したことを機に、保護下にあった湾岸諸国が英国の支援のもとで「独立」し

始めた。事実上の保護領であったオマーンでも、1970年7月23日、当時のサイド国王の一人息子カーブースが宮廷クーデターを決行し、国王に就任した。就任式に際して英国の軍人ジョン・グラハムが新国王カーブースに近侍している様子は、オマーンと英国の密接な関係を示していると言える。カーブースはオマーン・ルネッサンスと呼ばれる近代化政策を実施していくことになる。しかし、その前途にはさまざまな困難が待ち受けていた。

カーブース国王の最初の課題は国家統合と統治機構の整備であった。当初、カーブース国王率いるスルターン勢力は沿海部を支配するにとどまり、内陸部にはサウジアラビアの支援を受けたイバード派のイマーム勢力、南部には南イエメンの支援を受けた共産主義部族勢力が存在した。1970年代末までに、これらの勢力を懐柔し、軍事力の行使によって支配下に置いた。また、かつては英国に依存していた統治機構の整備では、各部族の勢力均衡と国王への権力の集中を図った。省庁、国軍、議会などの整備では各部族への役職の配分を意識する一方で、首相・外相・国防相・財相・中央銀行総裁といった要職を国王が兼ねることで、権力を集中させた。これは、王族に権力を分散させる傾向のある他の湾岸諸国とは異なるオマーンの特徴と言える。また、インフラ整備も積極的に行われた。独立当初は、日本から北海道を除いた程度の広く険しい国土にわずか70万ほどの人口が分散していたこともあり、インフラはかなり貧弱であった。しかし、1967年の原油生産開始を受けて経済は飛躍的に成長し、インフラの整備が進んだ。さらに、カーブース国王は、各地の部族長から陳情を受ける、大規模な「国王による行幸(Meet the People Tour)」を実施し、一般国民に国王の存在を可視化するとともに、「地方の声に耳を傾ける国王」というイメージを演出した。これらの施策はカーブース国王の統治を安定的なものにする上で重要な役割を果たした。

外交においても多くの困難があった。オマーンは1971年9月29日にアラブ連盟に加盟したが、加盟申請から1年以上経っており、同時期に独立した他の旧英国保護領と比較するとかなり長い時間がかかっている。国連加盟にも長い時間を要す

ることとなった。国内のイマーム勢力の背後に控えていたサウジアラビアとの関係が障害となっていたためである。この時期の国際的孤立は、現代オマーンの外交史において苦い記憶となっている。

中東の政治情勢において、オマーンの外交は君主制の維持を主眼として展開した。君主制を植民地時代の残滓と見做し打倒しようとするアラブ民族主義・共産主義の革命運動が続くなか、1979年、アメリカの強力な支援を受けていたイランにおいてイスラーム革命が発生すると、オマーンの危機感はさらに高まった。サウジアラビアとの歴史的対立を乗り越えて湾岸協力理事会（GCC）の設立へ漕ぎ着け、さらに軍事同盟化を主張した。軍事同盟化はイラン・イラクを刺激することを恐れたクウェートの反対により断念せざるを得なかったが、こうした危機意識のなかでオマーンはアメリカに接近し、1980年には国内の基地の利用を米軍に許可するに至った。これは、ホルムズ海峡に面する領土をもつオマーンの地政学的重要性もあり、今日に至るまでのアメリカとの関係の基礎になっている。

他方で、独立期の国際的孤立の苦い記憶から、オマーンは地域外交においては中立主義を貫き、交渉の場を提供する形での仲介外交にも積極的に取り組んでいる。これらは冒頭で触れた、中立で穏健であるというオマーンの印象の一環をなしていると言える。

このように多方面で功績を残したカーブース国王が2020年に逝去し、ハイサム新国王の体制が始まった。ハイサム新国王は即位演説でカーブース路線の継承を表明し、先代の政策を尊重しながらも、独自の政策を打ち出しつつある。例えば、国家基本法改正で王位継承における長子相続を明記した。後継者を自動的に決定するこのようなシステムは中東では画期的と言える。また、国家の要職を国王が兼任するシステムを改め、他の湾岸諸国同様、王族が大臣として権能を分掌する体制が生まれた。

このハイサム新国王体制にも2つの大きな課題がある。まず、石油依存経済からの脱却である。しかし石油・ガスによる収入がなくなることは、経済構造の転換を招き、国家制度にも変革をもたらす可能性がある。石油・ガスに代わる新たな財源として国民に税負担を求めることが国民への

歳出の説明責任を生じさせ、議会の権限の拡大につながる可能性もあるためである。次に、外交政策である。イラン核交渉やイエメン紛争など、周辺国に課題が山積するなかで、カーブース国王以来の仲介外交はますます重要となることだろう。また、オマーンの地政学的重要性を示すものとして新たに注目されるのが、海上交通の主要拠点としてオマーン中部に開発されているドゥクム港である。この港の活用のある方は今後のオマーンの政治・外交の帰趨を占うものになるだろう。

（高田虎太郎・東京大学文科三類）

第5回 2022年7月23日（土）

『日本とオマーンの関係：日本人学校教員の視点から』

内野 廣大（神奈川県立保土ヶ谷高等学校）

オマーンは灼熱の国である。夏は50℃に達するため、日本の桜を植えるを試みても、熱に強い品種でさえ平地で育てることは難しい。そのようなオマーンにも、現地で暮らす邦人と子どもたちがおり、日本人学校が子どもたちに教育を提供しているのである。第5回セミナーでは、日本人学校の活動や現地での生活などについて、教員として勤務した実体験に基づく講演がなされた。

オマーンの日本人学校は、正式名称を「オマーン日本人会補習授業校」といい、子どもたちが帰国後に日本の教育に適應できるように、日本の教科書で日本語を学ぶことを目的とした教育活動を行っている。ここには現地に生活拠点をもつ日本大使館の職員や商社の駐在員などの小1から中3までの子どもたちが通っており、校長と講師の2人体制で運営されている。子どもたちは昼間にインターナショナルスクールや現地の学校に通うため、補習校で学ぶのは夕方の1、2時間である。そのため、教科・科目の区分はあるものの、日本語に触れるということが特に強く意識されているそう。加えて、補習校は日本人が集まるコミュニティとしての役割ももつ。そのため、児童・生徒はこの補習校で週5日学ぶほか、週末には大使館や日本人会の協力を受けて実施される学校行事などに参加するという。この補習校で

2010年4月から2012年3月まで教鞭を執ったのが内野廣大先生である。「自分は専門家ではない」「サンプル数1の体験にすぎない」と強調する内野先生の語り口は、終始非常に謙虚なものであった。異なる文化に敬意を払い、誠実に向き合うその姿勢が、異なる文化の中で生きることについて、参加者に多くのことを語りかけた。

日本から遠く離れたオマーンにも、日本を感じられる場面が少ないながら存在した。例えば、日本製の家電や車である。オマーンでは日本製品への信頼が厚く、日本製の家電や日本車が好まれるそう。この「高品質な日本製品」という印象が日本人への好印象につながっているのではないかと内野先生は指摘した。また、当時オマーンには、日本のDAISOが1店舗出店していた。オマーンでは仕入れが困難であることもあり、価格は当時の日本円で140円～175円ほどと少し割高であったが、現地ではかなり人気であったそう。

このような日常生活の場面以外にも、日本とのつながりを意識することはさまざまにあったという。オマーンでは、マングローブ林の植樹を通じた緑化活動が日本から技術支援を受けて行われている。補習校の社会見学では、環境問題に取り組む日本人が活躍する施設を訪問した。また、海水の淡水処理を行う施設も日本の技術を導入しており、そのことを子どもたちに紹介したそう。

補習校ではスポーツ観戦や文化交流の機会にも恵まれたという。2011年には、ビーチサッカーアジアカップの決勝戦がマスケットで行われ、児童・生徒とともに観戦した。さらに、2010年のサッカーワールドカップ南アフリカ大会では、日本対カメルーン戦をパブリックビューイングで観戦し、日本の勝利を現地の人々と喜びという微笑ましい一幕もあったそう。また、内野先生の滞在中、オマーンでは、日本の伝統芸能に触れる機会が多くあった。2010年には日本の各種舞踊の公演が、カーブース国王の即位40周年を祝って行われたほか、2012年3月には和太鼓の公演が開催された。これらの公演にはオマーンの人々も多く鑑賞に訪れていたといい、日本文化に対する現地の人たちの関心の高さが窺われる。また、オマーン最大規模のお祭りであるマスケット

フェスティバルは、日本の工芸品に触れる貴重な機会であった。このほかにも、大使公邸でのコンサートや日本の「祭り」体験、書家の矢部澄翔氏による書道教室など、補習校の児童・生徒はさまざまな文化活動を行うことができた。

帰国後、内野先生は日本の教育現場で、オマーンの文化を生徒たちに積極的に紹介しているそう。現地の服装や伝統的な食事などに直接触れることで、生徒たちが気候や文化に関心を持ち、考察を深めることに期待している。

セミナーの最後には、東京2020オリンピックの競泳オマーン代表であったイサ選手の話が取り上げられた。入場行進でオマーンの旗手を務めたイサ選手は、日本では「中京大学への留学生」と紹介されたが、小学校5、6年生時には内野先生の補習校での教え子であったそう。補習校に通った児童が国際交流において大きな役割を果たしていることを内野先生はとても嬉しそうに語った。補習校の活動により播かれたともいえるこのような「種」が花を咲かせ、日本とオマーンの今後の架け橋となることが期待される。

(高田虎太郎・東京大学文科三類)

第6回 2022年8月4日(木)

『オマーンの信仰と宗教実践』

近藤 洋平(福岡女子大学)

本講演では、オマーンの人々の信仰や宗教実践について、イバード派(ハワリジュ派の流れを汲むイスラームの宗派)やオマーンにおける宗教の研究で知られる近藤洋平氏が解説を行った。最初に、オマーンの主要な宗教であるイスラームの受容と定着についての説明がなされた。預言者ムハンマドと同じ時代に生きたマーズィン・イブン・ガドゥーバは、偶像からの声を聞きこれについてメッカからやってきた人に助言を求めた。そこでムハンマドの存在を知ったイブン・ガドゥーバはメッカへと向かい入信したが、これがオマーンの人々とイスラームの最初の接触であると言われる。620年代にはオマーンの地域にもイスラームが伝来した。講演では、ムハンマドがオマーンの有効者に送ったとされる書簡も紹介された。オマー

ンには二つのキブラ(礼拝方向)を持つモスクが存在し、一部ではイスラーム初期のモスクであると言われている(ムハンマドは途中でキブラをエルサレムからメッカに変えている)。しかし近藤講師はその可能性は低いと考え、むしろこのモスクは、方角を正確に計測できなかった時代の様子を示しているものだろうとの見解を示した。オマーンではその後、8世紀半ばにイバード派の政権が成立した。

次に近藤講師は、このイバード派の世界観と宗教実践へと話を進めた。当派の古典的他者観によれば、人はイバード派、イスラームの他宗派、啓典の民、無神論者や二元論者に階層的に分類される。このうち来世で救済されるのはイバード派だけである。また、イバード派では、信仰告白、神への内面的な信仰に加え義務行為の実践が重視される。これらの条件を満たすものが信仰者とみなされ救済される。こうした考えのもと、ウラマーの役割は一般信徒に「正しい行い」を教えることとなる。実践面でも興味深い例が報告された。オマーンの一部のモスクでは、ミフラブ(キブラを示す壁の窪み)の上に中国製の陶磁器が埋め込まれているという。これは、インド洋に面するオマーンが海のシルクロードの一部であったことと関係していると考えられる。医療に関して言えば、イスラーム的な側面と呪術的な側面が共存している。出産時に出産を想起させるクルアーンの節が引用される一方で、雌鶏の卵を利用した治療も行われている。卵を火で炙ってその上に文字を書き、焦げた卵を頭に擦り付けるのである。またオマーンにはシーア派の人々も暮らしている。シーア派の人々が現パキスタンのハイデラバードから渡来したのは18世紀ごろである。現在彼らの多くは、マトラという町に集住し小売業に従事している。

現在オマーンには、イバード派、スンナ派、シーア派など様々な宗派の人々が暮らしている。また、移民労働者としてやってきた人の中にはキリスト教徒も存在する。近藤講師は次に、こうした人々を抱える国家の宗教的な取り組みについて解説した。1996年に制定された国家基本法(*)はイスラームを国教、イスラーム法を立法の源としつつも、在留者に一定の信教の自由を認めている。婚姻、相続などについて定

める身分関係法は、アラブ連盟の「統一アラブ身分関係法草案」を土台としている。近藤講師はこの点について、宗派を超えたアラブ・イスラームの枠組みを意識したのではないかと指摘している。他方、刑法はイスラームの道徳に基礎を置く一方で、ユダヤ教、キリスト教への冒涇を罰するなど啓典の民にも配慮している。国家の宗教的な取り組みは法律の制定に留まらない。宗教寄進・宗教事項省にあるファトワー局は、国民から寄せられる悩み事に法的裁定を下している。寄せられる相談は、食事の作法から待婚期間中の求婚の有効性まで色々である。

先にあったように、イバード派の古典的他者観は排他的な色が強い。しかしながら近藤講師は、19世紀半ばごろから他者観が変化してきていると指摘する。現代の主要なウラマーは党派主義を否定し、反対に宗派間の連帯を唱えている。こうした考えのもと、救済されないのはむしろ一部の党派主義者となる。

質疑応答では、宗派間の礼拝方法の違いやイバード派から見たシーア派像など信仰や宗教実践についての質問が提示された。また他者観の変化のタイミングやオマーンにおけるシーア派の人々の状況などについての質問が寄せられ、講演に厚みを加えた。(*)国家基本法は2021年1月に改正されたが、本セミナーに関わる内容は変更されていない。(2022年8月28日登壇者後書き)
(宇川晴・東京大学総合文化研究科地域文化研究専攻)

駒場博物館「オマーン展」

第1回ギャラリートーク

2022年6月30日(木)

オマーンの馬事文化

佐藤 美子(写真家)

オマーンの人々と馬の信頼関係

2022年6月30日、写真家・佐藤美子さんを講師に迎え、東京大学中東地域研究センター主催のギャラリートーク「オマーンの誇り：王家が率いる馬事文化」が開催された。そこでは、馬が人間と同じように喜んだり、安心したり、退屈したり、さまざまな感情と主体性を持って生きている

ことが明らかになった。そして、そうした感情を感じとり共にいるオマーンの人々と馬の間には強い信頼関係が築かれていた。

佐藤さんの説明によると、オマーンでは馬が人間と同じように退屈する感情を持っていると認識されている。例えば、王立厩舎のたくさんの馬房の中でも、海が見える馬房は少ないのだが、特定の馬がこの馬房を占有するわけではなく、交代であてがわれている。これは、人間と同じように馬も馬房から見える景色が毎日同じだと退屈してしまうし、美しい海の景色を眺めることでリラックスできるだろうと考えられているからである。

また、元石油相が所有する厩舎の馬房では、馬の頭より少し高い位置に天井からボールが吊るしてあった。馬が決して広くない馬房のなかで長時間過ごせば、必ず退屈するだろうと感じたためだ。実際に、馬はやることなく退屈になると、ボールを頭でついて遊ぶようになった。

あるいは、王宮馬として一日の訓練を終えた夕暮れ時、疲れた馬たちは馬房に戻される前に労いの角砂糖が差し出される。これは、厩舎員と馬がお互いに相手の状態を慮り、信頼関係を築く相手として認識しているからだと言明があった。厩舎員たちが馬との交流の時間を大切にしていることは、佐藤さんの写真にうつった彼らの表情を見れば明らかだ。

そんな馬たちを「アラビアンナイト」誌においては「馬の尾のように美しい髪」といった最上の褒め言葉にも使い、賛美の念を表現している。

一方で、馬たちの方もこうしたオマーンの人々を強く信頼しているようだ。王立厩舎では馬が犬の「お座り」のように座ったり、横腹を地面につけて横臥したりすることもある。いずれの姿勢も、何かが起きたときすぐに逃げ出すことのできない、馬にとっては危険な姿勢だが、周囲に見えるオマーンの人々への強い信頼があるからこそ、これらの姿勢をとることができるのだろう。

このように、オマーンの人々にとって、馬は感情や主体性を持っていると認識されている。「人は馬を信頼しているし、馬は人を信頼している」という言葉に表されるように、オマーンの人々は馬を尊重し気持ちの交流をはかる、独特な関係を築いて

いると言える。

臆病ではない、オマーンの馬たち

オマーンの人々の馬に対する認識は、日本では全く考えられないようなものばかりである。他人の知識や研究結果の受け売りではなく、自ら馬と限りなく接近し、共に生活し、世話をする中で経験して体で得られた知識が豊富に蓄えられている。

例えば、日本では馬をはじめとした陸上の動物たちは基本的に水辺や海を怖がるものという印象が持たれている。だから、海や水中に馬を引き込むなどといったことは到底考えられない。しかし、オマーン王立厩舎の厩舎員は過去の経験から、馬が実は泳ぎを得意とすることを知っており、心肺機能の強化のために海で泳がせている。

また、日本では「馬の後ろに回ったら蹴られる」という知識が常識として広く知られている。しかし、佐藤さんがオマーンの厩舎員にそのことを伝え、「それはあり得ない」という反応が返ってきた。「人は馬を信頼しているし、馬は人を信頼している」ため、馬が人を理由なく蹴ったりするはずがなく、実際に蹴られることはない。佐藤さんも王立厩舎では、馬の後ろを歩いていったという。これらの日本の「常識」の根拠には「馬はもともと臆病な動物」という、もっともらしい認識がある。しかし、佐藤さんの写真に写るオマーン王立厩舎の馬たちは、王宮式典で整列している背後から大量の花火の爆発音が突然鳴り響き始めているのに微動だにしていない。これは、馬たちがかつて戦の際に喚声や悲鳴で怖気づかないように、生まれてすぐの頃から大きな音を何度も聞かせて体を慣らしてきたからである。馬が臆病かそうでないかの違いは、生育環境の影響も多大なことが明らかになった。王立厩舎のディレクターは、特に品種について強調し「純血アラブ馬の特徴は、勇敢で賢いこと」と言明している。

王立厩舎では、時々馬を精一杯ブラッシングして大きな鏡の前に連れてくる。馬はじっと自分の姿に見入っている。「馬に自信を持たせるため」という。敢えてこのようなことをするのは、周囲の美しい馬たちに圧倒されて委縮した気持ちになるのを避けるためではないかと佐藤さんは推測している。ともあれ王立厩舎では、馬

が鏡に映った自分の姿を認識する能力を持っていると確信しているようだ。

学術的知見と馬への理解

ここで、馬の自己認識能力と人と馬との関係について論じた学術成果を、少し紹介したい。

オマーンの人々は馬が鏡に映った自分の姿を自己認識できることを長年の経験から知っていたが、馬にそのような認識能力があることが初めて学術的に証明されたのは、実に2021年になってからだ。ピサ大学の研究グループは14頭の馬を鏡の前に立たせるミラーテストを行った(Baragli et al, 2021)。テストにあたり、実験初日は馬が認識できない透明なジェルで、二日目は馬が認識できる黄色いジェルで馬の顔に印を描いておいた。実験の結果、11頭の馬が自分の顔に印がつけられていることに鏡を見て気がつき、これを剥がそうとした。中には舌を出したり引っ込めたりして様子を窺う馬もいた。動物の自己認識能力が証明されたのは、霊長類を除いては初めてのことだ。

学術的な知見からは2021年になって初めて証明された知識も、オマーンの人々にとっては実験するまでもなく生活の中で得られ実証されている知識だった。日本などの馬の「調教」をめぐるでは、馬を「臆病な動物」と認識したり、自己認識能力や主体性がないことを前提とすることが多い。しかし今回の講演で語られたオマーン王立厩舎の馬に、日本におけるそのような「常識」は通用しない。

フィンランドの二人の研究者は、馬に対する科学的な知識(scientific knowledge)より特定の関係から得られる知識(situated knowledge)の方が優れていると指摘している(Karkulehto and Schuurman, 2021)。

一対一の馬との関係によって、馬のパーソナル・ヒストリー(何歳で買われ母親と離れたかなど)や、個々の馬から身体的に得られる言語化できない理解(どんなときに退屈になるかなど)、その馬が身をおいた環境についての認識(他の馬や人間との関係)など、特定な関係から得られる知識(situated knowledge)はお互いに信頼できる関係を構築するためのコミュニケーションに最も必要だと論じた。

終わりに

佐藤さんの講演によると、伝染病によって馬が激減してしまったオマーンにおいて、王立厩舎で純血アラブ馬の再育成が始まったのは、故カブース国王就任後すぐ後の1970年代のことである。より古くは、トークの中でマルコポーロの『東方見聞録』に、オマーンから多数の馬がインドへ向けて出帆し、大きな利益を得ていたことが記されているという紹介があった。また、講演の質疑応答の中でも、伝承によると紀元前10世紀、ソロモン王にオマーン人が伺候し、その時に贈られた純血アラブ馬がオマーンの馬の礎になったと言われていることが述べられた。そして、「伝承というのは、古の人々がそれを心の糧として代々語り継いだということなので、大事

な点だと思います」と述べられた通り、純血アラブ馬との長年にわたる信頼関係の構築が、深い理解や認識の背景にあると感じられた。

馬に限らず、私たちはさまざまな動物と関わり、時にはその動物について、より知識を得ようと、さまざまな試みを行ってきた。そのような試みのなかでは、研究者による観察よりも、その動物と一緒に生きてきた人びとの知識の方が優れていることも多い。

オマーンの生活の中から体で得た馬の知識は、私たちに動物と人間の関係や、動物についての知識を得る方法について、また、動物の主体性について、多くのことを教えてくれる。

参考文献

Baragli, Paolo., Chiara Scopa, Veronica Maglieri, and Elisabetta Palagi. "If horses had toes: demonstrating mirror self recognition at group level in Equus caballus" *Animal Cognition* 24, (2021): 1099–1108.

Karkulehto, Sanna. and Nora Schuurman. "Learning to Read Equine Agency: Sense and Sensitivity at the Intersection of Scientific, Tacit and Situated knowledges" *Animal Studies Journal* 10-2, (2021):111-139.

(Sese Ma・京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士課程)

5. センターの活動紹介

バフワーン文庫の図書の寄贈式典

6月9日(木)に、駐日オマーン・スルタン国大使館よりモハメッド・アル・ブサイディ大使、マーナ・アルカシリ参事官を駒場キャンパスに迎えて、本学大学院総合文化研究科の森山工研究科長、真船文隆副研

究科長、月脚達彦副研究科長出席のもと、オマーン・スルタン国政府からUTCMES 附属ムハンマド・サウード・バフワーン中東研究文庫に対する図書の寄贈式典が開催されました。



●UTCMESスタッフ紹介 (2022年9月30日現在)

〈スタッフ〉

高橋 英海 (センター長、兼務教授)
荻谷 康太 (兼務准教授)
鈴木 啓之 (特任准教授)
倉澤 理 (バフワーン文庫・特任研究員)

大塚 修 (兼務准教授)
森元 誠二 (客員教授)
野口 舞子 (特任助教)
瀬口 美加 (事務補佐員)

〈UTCMES運営委員〉

高橋 英海 (委員長、総合文化研究科教授)
荻谷 康太 (総合文化研究科准教授)
真船 文隆 (総合文化研究科教授)
菊地 達也 (人文社会系研究科教授)

大塚 修 (総合文化研究科准教授)
清水 晶子 (総合文化研究科教授・副研究科長)
黛 秋津 (総合文化研究科教授)

〈スルタン・カブース・グローバル中東研究寄付講座運営委員〉

高橋 英海 (委員長) 大塚 修 荻谷 康太 橋川 健竜
清水 晶子 真船 文隆 黛 秋津

●発行者情報 UTCMESニューズレター VOL.21 2022年9月30日発行

発行：東京大学大学院総合文化研究科グローバル地域研究機構中東地域研究センター(スルタン・カブース・グローバル中東研究寄付講座)
〒153-8902 東京都目黒区駒場3-8-1 TEL: 03-5465-7724 FAX: 03-5454-6441
<https://park.itc.u-tokyo.ac.jp/UTCMES/>

編集補助：岡本優加子

印刷：佐川印刷株式会社 〒140-0004 東京都品川区南品川5-2-10 TEL: 03-5715-0802 FAX: 03-5715-0752